うのお猿さん、赤いおべべが大おすき、すすやちやぶちやぶ〳〵、ゆうべえびすこでよばれていつたら、鯛の汲物小鯛の焼もの、一つぱいおすすれすすれ、二はいおすすれすすれ、三ばい目には魚がないとて、奴のすすはきとんばた〳〵、おくさまおかえり殿様おかえり、からすの行水羽がばた〳〵、まず〳〵一貫かし申した。せんそうまんそう。

○　おらがせどのむつやの木、六つで鐘をつきそめて、七つでおこまへまへらして、おこまのお堂で日が暮れて、今晩お宿はどことらしよ、宿はせまし、夜は長し、一年たつてもまだ来ない、二年たつてもまだ来ない、三年目正月でひいふうみい四五六七八九、十から下つたお芋やさん、お芋は一升いくらです、お前の事ならまけてやろ、ざるお出し、頭を切られたとうの芋、しつぽを切られた八つ頭。

○　とん〳〵となりの魚屋さん、お魚ずくしのお正月、まつ黒まぐろの御紋付、仙台ひらめのおはかまで、いかにも立派なだんなぶり、ほう〳〵小だいのおすいもの……以下不明

○　ほゝほけきよやうぐいすや、梅の小枝でひるねして、ぢや〳〵ぶの木の下で、たたみ三じよう酒三升、高いとこのたけのこ、低いとこのひきがえる、海の中の小魚

○　鎌倉へ詣る道に椿うえて育てて、日が照れば雀どおこに、雨が降れば雨宿り、雨宿じや降りに宿りて、新茶いや〳〵甘茶いや〳〵、それでお方へ目がついた、目がついたらだいておおやり、おこばこまあくらに、おこばこじや髪がこわれる、お前のおん手をまあくらに、殿様のまあくおら元に、きつねこんこと鳴いたとて……以下不明

風邪に関する民間療法

赤橋尚太郎

鎌倉市由比ヶ浜の国宝一鳥居傍に畠山六郎重保墓と伝える大きい石造宝篋印塔がある。墓畔に茶を竹筒に入れて奉納する習慣がある。場所は重保邸跡と伝え、彼がかぜをひき咳に苦しんでいた時討手をうけたので咳のため充分戦えず非業の死をとげたと伝え、風邪をひいた時、咳の出る時には竹筒に茶を入れて「六郎様」に奉納するとなおると信ぜられているのである。竹筒に茶を入れて奉納し、咳の出るのをなおしてもらうと云う信仰は同じ鎌倉市二階堂の永福寺跡にある姥石にもある。三浦郡葉山町上山口の間門には路傍に風化した凝灰岩塊を切石で囲んだほこらがあり、

此処にも同じ様な竹筒が沢山奉納してある。附近に人がいなくて聞けなかつたが恐らくこれも同じ様な信仰だろうと思う。竹筒は古い容器であり、茶は民間薬として古くから用いられた咳の薬である。茶が咳乃至風邪ひきに対しての民間薬として今も使用されていることは、時々聞くことで、横須賀市公郷町では熱い番茶をのむというのがあり、逗子市沼間では茶の木の葉を煎じてのむと咳がとまるといい、田浦町では茶でうがいすると咳がとまると云つている。船越町では濃い茶を茶碗に入れて線香三本を添えて人目につかぬよう三つかどに置いてくるとかぜがなおるという風邪神を送り出す形式のまじないがある。

横須賀市立工業高等学校生徒にたのんで（昭和二十八年）風邪ひき、咳等に関する民間療法を集めてもらつた中に右の資料があつたのである。然し注意せねばならぬのは横須賀市という土地は各地の人が集まつたところで特に終戦後来た人が相当多いから、同じ横須賀市域内外で採集してもそれを語つた人が何処から来た人であるかによつて風習も違つているから、それをそのまま全部横須賀附近で一般に使われているものとすることは危険である。この点に注意して採集したが或は多分に他地方のものが混入しているかも知れない。次に示すものは皆この資料に依つたもので単に町名を挙げたのは横須賀市内であり、他に鎌倉市、逗子市、横浜市の一部のものも参考に加えた。

風邪ひき、咳等について横須賀地方で行われている民間療法は「茶」の外にも色々あるから次にあげてみよう。大別すると煎汁を飲用する。うがいする、貼りつける、巻きつけるの外、腰や首にさげておくというのがあり、その他色々なまじないがある。若い人達の間では大体行われなくなつているが老人（特に女子）の間にはまだまだ行われているものがある。案外なのは横須賀市馬堀町にある馬頭観音の湧水に対する薬用効果が今も盛んに信ぜられていることであつた。

風邪ひき

飲用（食うを含む）されているものとしては蜜柑の皮の煎汁（日の出町）、皮を陰干し粉にして水にまぜてのむ（公郷町）、ねぎをきざんで食う（逗子市沼間）、ねぎをきざんでみそとまぜてのむ（坂本町、汐入町、三浦郡葉山町）、ねぎをきざんでみそとかつぶしを入れ熱湯をかけて食う（安浦町）、ねぎを湯に入れてのむ（逸見町、吉倉町）、梅干を焼いてのむ（大津町、逸見町、堀内町）、梅干を焼いて茶の中に入れてのむ（公郷町）、にんにくを焼いて食う（安浦町、田戸台町）、あんず実を粉にしてのむ（浦郷町）、さふらん花に湯をついでのむ（小矢部町）、たんぽぽを煎じてのむ（船越町）、ゆきのしたを煎じてのむ（鴨居町、久里浜町）、きんかんの焼酎ずけをのむ（公郷町）、きんかんに氷砂糖を入れて煎じてのむ（田浦町）、しようがの根をすつて煎じてのむ（浦賀町、久里浜町）、白南天の実を煎じてのむ（公郷町）、藤のこぶを煎じてのむ（長沢町）等が行われており、首に巻くものとしてはねぎを焼いて（田浦町）、ねぎを布に包んで（富士見町、久里浜町、鎌倉市山内）があり、にわとこの木の皮を風呂の中に入れて浴する（浦賀町）と云うのもある。「まじない」としては部屋の中でするめを焼いていぶすとかぜの神が出て行く（追浜町、汐入町、坂本町、安浦

町、田浦町、富士見町、公郷町、横浜市戸塚区上倉田町）というのが広く行われており、いかのすみをはく所を焼いて煙を家に入れる（鎌倉市大船）は其の変形と思われ、にんにくを軒下にさげておく（鎌倉市大船）と云うのがあり、かぜの神を送り出すと云うのには四つかどに赤飯を置いてくる（汐入町、浦賀町、横浜市上倉田町）、豆を紙に包んで三つかどに置く（汐入町、横浜市上倉田町）、家から少し離れたところに何かを捧げて後をふりむかずに帰ってくるとかぜの神はそのものについて行ってしまうから二度とその家に入って来ない（横浜市金沢区六浦）と云うのがある。又かぜをひいたら家の外で誰かに「み」であおいでもらう（長井町）、竹の細いのをふって音を立てるとかぜの神がにげる（三浦郡葉山町）、正月四日に海辺で焚火し、その火で餅を焼いて食うとかぜをひかぬ（秋谷町）、地蔵様に石三つのせる（公郷町）、馬堀の馬頭観音の水をのむとかぜをひかぬ（大津町）等がある。

この外特殊のかぜに関するものとして、はやりかぜの時にはにんにくを腰にさげておくとかからぬ（追浜町）、馬堀の馬頭観音の水をのむ（馬堀町、走水町）、同観音に奉納されている赤白の旗（手拭）の布を切ってきて首にまいておく（走水町）があり、お七かぜの時には入口に「吉さんおりません」と紙に書いてはっておく（坂本町）、ほっぱれかぜ（耳下腺炎）の時には梅干をつぶしてはれたところにはる（三浦郡葉山町）がある。百日咳に対しては色々行われており、白南天の茎や実の煎じ汁をのむ（浦賀町、大津町、船越町、富士見町）、きんかんと砂糖の煮汁（小矢部町、上町、船越町、逗子市池子）、さぼてんのおろし汁（公郷町）、蓮根のしぼり汁（富士見町）、蓮の節のところのすり汁（公郷町）など飲用の色々があり、馬堀の馬頭観音の湧水をのむとなおる（不入斗町）、軽くすむ（馬堀町）があり、又同観音の鈴の紐のきれはしを同所の水にひたしてうがいする（安浦町）などがある。「まじない」としては白南天の枝（追浜町）、木（追浜町）、実（富士見町）を腰に下げる。白南天の木で杵形を作って腰に下げる、いちようの木でこづちを作って腰に下げる（坂本町、池上町）、いちようの葉を腰に下げる（吉倉町）、くちなしの木で杵形を作って腰に下げる（西逸見町）、白南天の枝を首にさげる（上町、小矢部町、横浜市上倉田町）等があり、「今日で百日目」と紙に書いて入口に貼る（浦賀町、追浜町）、しやもじに「クツメキノセキ」と書いてさかさに入口にうちつける（東逸見町）、しやもじに名を書いて入口にさかさにうちつける（浦賀町、久里浜町）、同入口にさしておく（浦賀町、久里浜町）、しやもじに年と名を書いて入口にうちつける（汐入町）、しやもじに年と名を書いて入口に下げておく（鎌倉市極楽寺）等があり、新なすびを入口に下げる（日の出町）もある。大工のすみなわを首にまくとなおる（上町）だの、馬堀の馬頭観音に奉納してある手拭をさいて首にまく（馬堀町）等があり、白南天で作った箸を使うとかからない（富士見町）があり、かぜの神を送り出すものとしてはしやもじと灰を盆にのせ四つかどに送り出す（鎌倉市岩瀬）というのがある。又入口で三回おじぎする（田浦町）入口で三度きゆうをすえる（田浦町）などもある。

咳をとめる方法としては煎じ汁をのむというのが多いがかぜの薬とされているものと共通のものが多い。千成ほうずき（横浜市戸塚町）、きんか

んを氷砂糖で煮て（田浦町）、きんかんの煮汁（追浜町、逗子市沼間）、きんかんの葉（坂本町、池上町、吉倉町）、寧柑の皮（横浜市戸塚町）、白南天の茎（大矢部町）、同実（上町、田浦町、大津町、追浜町、逗子市池子、鎌倉市大船）、蓮の節（長井町、平作町）、ジギタリス根（追浜町）、おんばこ葉（久里浜町、田浦町、船越町、追浜町、坂本町、逗子市沼間、池子、横浜市上倉田町）、大根を小さく切つて砂糖を加えて（汐入町）、大根おろしに砂糖を入れて（横浜市）、ききょう根（同）、とうもろこし毛（坂本町）、いなご（大津町）等がある。のどに巻いておくというのにはねぎをきざんで袋又は布に包んで（長井町、富士見町）、塩を焼いて布に包み首にまく（田戸台町）があり、ねぎを胸にはつておく（汐入町）と云うのもある。「まじない」としては例の鎌倉市由比ヶ浜にある六郎様（前出）におまえりして竹筒に茶を入れてあげるとなおる、「咳でこまるからなおして下さい」と祈り、なおつたらお茶をあげる、六郎様にあがつているお茶をのむとなおる等があり、横浜市戸塚で採集されたものとして川をせきとめておき「自分のせきをとめてもらう」ととなえるとなおると云うのがある。

かぜに伴う発熱についてのものとしてはやはり煎じ汁をのむと云うのが多い。丹波ほうずき（富士見町）、しいたけ（小矢部町）、しようぶの根（田浦町）、よもぎ（浦賀町）、みみず（池上町、追浜町、横浜市上倉田町）、いなご（池上町）、しやぼてんの汁（逗子市沼間）、医者いらず（しやぼてんの一種）をおろしてのむ（富士見町）等があり、貼るとか塗るとかの類にはごはんをねつて塩をまぜ、紙にのばして足の土ふまずに貼る（内川新田町）、きゆうりをすつて足の裏に塗る（浦郷町、大津町）があり、まじないとしては茶殻を入れた枕をすると熱が下る（鎌倉市戸部町）等がある。

要するに植物や虫の煎じ汁をのむとか、汁を塗つたり、細かに切つてあてておくと云つた漢方医的のものと、「まじない」とが行われていることがわかる。前者は案外広く行われているようである。

ほめことば

青木　進

横須賀市野比で行われていた「ほめことば」を採集したから次に記す。これは祝の席で代表者が祝の言葉としてとなえたものだが今の若い人達はあまり知つていないようである、

「正月二十八日のことなれば、村の若いし集まつて、武山不動へ参詣し、さいせん三文うちなげて、北を遥かに眺むれば、はげ、ほんもく、十